

日本語における左方枝分かれ条件について (On the left branch condition in Japanese)

葛西 宏信
(北九州市立大学)

要旨

本稿では、Agbayani et al. (2015) の、統語的な制約によりかきまぜが適用できない要素に対して音韻部門でかきまぜを適用するという仮説を拡張し、いわゆる左方枝分かれ条件 (Left Branch Condition) に違反するようなかきまぜが、音韻部門でのかきまぜであると主張する。この分析によれば、問題のかきまぜが意味解釈に影響を与えないことをうまくとらえることができる。また、意味解釈に影響を与えない長距離かきまぜも音韻部門でのかきまぜであり、統語部門でのかきまぜは節境界を越えないと主張する。

キーワード：左方枝分かれ条件、島、かきまぜ、削除、再構築

1. はじめに

Ross (1967, 1986) の (1) の左方枝分かれ条件 (Left Branch Condition、以下LBCと表記する) は、(2) のような名詞句の中の、主要部の名詞に先行する要素 (所有者や決定詞など) が、その名詞句の外に移動することを禁じる条件である。

- (1) No NP which is the leftmost constituent of a larger NP can be reordered out of this NP by a transformational rule.

(Ross 1986: 127)

- (2) *Whose₁ did you meet [t₁ teacher]?

(3) の非文法性は、LBCが日本語にも適用されるということを示している。

- (3) a. *?はなこの₁ ジョンが [t₁ カバンを] かくした。 (Kato 2007: 103)
b. *僕は [Op₁ 君が [NP t₁ (の) 写真を] 持っているよりも] たくさんの女優に会った。 (Kikuchi 1987: 23)

(3a) の「はなこの」のように、名詞句の中の、主要部の名詞に先行する、「の」でマークされた要素へのかきまぜの適用を、本稿ではLeft Branch Scrambling (以下LBSと表記する) と呼ぶことにする。また、日本語の比較構文において空演算子の移動が関与しているとする (Kikuchi 1987)、(3b) の非文法性は、LBCの違反として説明することができる。

しかし、以下に示すように、LBCに違反しているにも関わらず、容認可能な例も報告されている (Yatabe 1996, Takahashi and Funakoshi 2013, Shiobara 2017などを参照)。

- (4) たなか先生の₁、多分これが [t₁ 最後の著書]になるだろう。
(Yatabe 1996: 304)
- (5) a. 誰からの₁ たろうが [t₁ 手紙]を捨てたの?
(Takahashi and Funakoshi 2013: 237)
b. ?はなこからの₁ たろうが [t₁ 手紙]を捨てたの?
(Arano and Oda 2019: 49)

LBSの中には、容認可能な (4) や (5) が存在するという事を考えると、日本語でLBSは原理的に可能ではないのだろうか。本稿ではそのような可能性を追及していきたい。

2. 音韻部門でのかきまぜ

Takahashi and Funakoshi (2013) では、PPのwh句を名詞句の中から動かした場合、(6) のように弱交差現象が観察されると主張している。

- (6) *どの会社からの_{1/2} 昨日そこの₂の社員が [t₁ 招待状]を受け取ったの?
(Takahashi and Funakoshi 2013: 243)

節内のかきまぜは弱交差現象が観察されない、つまり、かきまぜを受けた要素が、移動先で新たに束縛代名詞を束縛することができることが広く知られているが (Tada 1990, Saito 1992, Yoshimura 1992などを参照)、LBSでは、それができないということになる。つまり、長距離束縛と同じように、変項束縛を可能にしないということになる。Arano and Oda (2019) も、LBSが長距離かきまぜと同じように、意味解釈に影響を与えないという観察をしている。以下の文がその例の一つである。

(7) a. 誰かがみんなへの手紙を書いた。ヨ > ヴ; *ヱ > ヨ

b. ?みんなへの_i 誰かが [t_i手紙]を書いた。ヨ > ヴ; *ヱ > ヨ

(Arano and Oda 2019: 49)

本稿では、LBSが意味解釈に影響を与えないということを踏まえ、LBSが音韻部門でのかきまぜであるという提案をする。もしLBSが音韻部門でのかきまぜだとすると、上記の意味解釈に影響を与えないという観察をとらえることができる。では、なぜLBSが統語部門で適用できないのだろうか。

Agbayani et al. (2015) は、統語部門と音韻部門の両方でかきまぜが適用できるが、もし統語部門でかきまぜが適用可能であれば、統語部門でかきまぜを行い、統語的な制約によりかきまぜが適用できなければ、音韻部門でかきまぜを行う、という提案をしている。彼らの理論を拡張して、本稿では、LBCが統語部門での制約であるため、LBSが統語部門で適用できず、音韻部門のほうで適用されると主張する。

(3b) が非文法的であるのは、空演算子は意味解釈に影響を及ぼす要素であるため、音韻部門では移動できず、統語部門で移動しなくてはならないため、LBCの違反となる。上の提案が正しければ、音韻部門でのかきまぜには、統語的な制約であるLBCは適用されないが、他の音韻的な制約が課せられている可能性は残る。実際、Shiobara (2017) は、左方枝分かれ条件を破るような移動に関して、音韻的な制約を提案している。(3a)の例も、「はなこの」の後にポーズを置けば、容認性が上がることを考えると、LBSが何らかの音韻的な制約に従っていると言っているのではないだろうか。LBSにどのような制約が課せられているかは、より詳細な検討が必要ではあるが、それは今後の課題としたい。¹

本稿の主張が正しければ、音韻部門でのかきまぜは、他の島の条件にも従わない、つまり、かきまぜは、島の効果を示さないという予測をする。Saito (1985: 246-247) 以来、日本語のかきまぜが島の効果を示すかどうかということがこれまで議論されてきたが、実際、Bošković (2004) は、かきまぜの例である (8a) は、空演算子が関与している (8b) と比べると、かなり容認度が高いという報告をしている (Bošković and Takahashi 1998も参照)。

- (8) a. (?) [その本を₁ [ビルが [メアリーが _{t₁} 読んだから] 驚いた]]。
 b. ?*[Op₁ [ビルが [メアリーが _{t₁} 読んだから] 驚いた] よりも] ジョンは
 たくさんの本を読んだ。 (Bošković 2004: 622)

(8b) の空演算子は、音韻部門で動くことができず、統語部門で動くしかないので、付加詞条件という島の違反を引き起こす。一方、(8a) のかきまぜは、音韻部門で動くことができるので、島の違反を引き起こさない、ということになる。

3. 長距離かきまぜ

(9) に見られるように長距離かきまぜの適用を受けた名詞句は、かきまぜ後の位置で解釈されず、もとの位置で解釈されるという観察がなされてきた (Saito 1989、Tada 1990などを参照)。

- (9) *どの本にも_{1/2} [その₂著者が [花子が _{t₁} けちをつけたと] 言った]。
 (Saito 2003: 486)

意味解釈に影響を及ぼさないという点においては、長距離かきまぜはLBSと同じであるので、これら二つのかきまぜに対して統一的な説明をすることができるのではないだろうか。本稿では、Ueyama (2002) やFukui and Kasai (2004) とともに、長距離かきまぜが音韻部門での操作であるという可能性を追求する。本稿の分析では、かきまぜが統語的な制約によって統語部門で適用できない時に、音韻部門で適用されることになるので、なぜ長距離かきまぜが、統語部門で適用できないのか、つまり、なぜ、統語部門でのかきまぜが節境界を超える

ことができないのか、という問題を考える必要がある。

Goto (2016) で提案されたラベル付けに関する提案を採用する。統語部門でのかきまぜが Chomsky (2000, 2001) の Phase Impenetrability Condition に従うとすると、(10) のように、かきまぜを受けた要素は埋め込み文のエッジに移動する。本稿では、Fukui (1986) や Kuroda (1988) に従って、日本語の主語は基底生成された位置にとどまることができると仮定する。

(10) [α XP_i [Subj [t_i V] v]]

この論文では、Goto (2016: 335) で提案された、ラベルが与えられていない {XP, YP} 構造は抜き出しにとって不透明な領域を形成する、という仮説を採用する。かきまぜは、英語の TP 指定部への移動のような、素性の照合を伴う移動ではないという仮定に立つと (cf. Saito and Fukui 1998)、(10) の α は、ラベルが付与されていない構造となり、そこから何かを移動させることはできない。したがって、XP を上の相のエッジに移動させることができず、かきまぜが節を超えることがないということをとらえることができる。

従来の分析によると、A/Aバーの区別を基に、かきまぜを特徴づけてきたが、そのような特徴づけは、もはや必要なくなる。節内でのかきまぜは、統語部門で起こる操作であり、節境界を超えるかきまぜは、音韻部門で起こる操作ということになる。

ラベルがインターフェイスでどのような役割を果たしているかという問題は、依然として議論の余地があるが、本稿の立場としては、統語部門でできた構造にはラベルが必ずしも付与されていなくてもよいという立場をとっていることになる。Chomsky (2013) のラベル理論では、ラベルは、どちらのインターフェイスにも必要という立場が取られているが、Takita (2020) は、意味解釈にとっては、統語構造はラベルは必要なく、ラベルの情報は線形化のために必要だという主張をしている。Takita (2020) の主張は以下の通りである。

(11) Labels are required solely for linearization in the sense that only labeled SOs can have the relative linear order of their members determined. (Takita 2020: 82)

Takita (2020) のアイデアとしては、ある統語構造にラベルが付与されることによって、その統語構造のメンバーの間に非対称性が生まれ、それをもとに線形順序を決めることとなる。しかし (10) は、以下のようなメカニズムがあれば、仮にラベルが付与されていなくても、(10) の統語構造に関しては、線形化されることになるのではないだろうか。

- (12) 統語構造 $\{\alpha, \beta\}$ において、 α のコピーを β が支配していれば、 α は β に先行する。

したがって、(10) でXPが他の要素に先行することをとらえることができる。

本稿の分析にとってのもう一つ重要な点を次に見ていきたい。かきまぜと違って、英語のwh移動は、節境界を超えて長距離の移動が可能であるが、連続循環的に移動すると、wh移動も、まずは以下のようにいわゆるvPのエッジを移動していくことになる。

- (13) [α wh_i [Subj v[V t_i]]]

連続循環移動における途中の経由地で、素性の共有が起こらないとすると、(10) と同じように α にラベルが付与されないことになり、 α からwhが移動できなくなってしまう。したがって、連続循環移動における途中の経由地でも、何らかの素性の共有が起こるという立場を取らざるを得ない。vPのエッジに関しては、今後検討が必要であるが、少なくともCPについては、McCloskey (2002) は、連続循環移動する際の途中の埋め込み文のCが一致を引き起こすことを示すデータを提示している。以下のアイルランド語のデータを見ていこう。

- (13) a. Creidim **gu-r** inis sé bréag.
 I-believe GO-Past tell he lie.
 ‘I believe that he told a lie.’ (McCloskey 2002: 185)
- b. an ghirseach **a** ghoid na sígaí.
 the girl *aL* stole the fairies
 ‘the girl that the fairies stole away.’ (McCloskey 2002: 189)

- c. an t-ainm a hinnseadh dúinn a
the name aL was-told to-us aL
bhí e ar an áit
was on the place
'the name that we were told was on the place.'

(McCloskey 2002: 185)

(13a) が示すように、アイルランド語には、定型節の補文標識が *gu* という形で具現化しているが、(13b) では、演算子移動が起こった際には、補文標識は違う形で具現化している。(13c) が示すように、演算子が最終的に移動するCPの主要部の補文標識だけではなく、途中立ち寄るCPの補文標識も *a* という形で具現化している。

4. LBCの修復

Ross (1969) 以降、島の違反を修復できるかという問題は多くの研究者の関心を集めてきた (Merchant 2001や Barros et al. 2014 などを参照のこと)。本節では、(14a) の右方転移と呼ばれる構文をもとに、日本語においてLBCが修復できるのか、という問題を考えてみたい。まずは、(14a) の右方転移構文を見てみよう (久野1978、Tanaka 2001などを参照)。

- (14) a. 太郎が e 食べたよ、りんごを。
b. 太郎が e 食べたよ、りんごを_i {太郎が_i—t_i—食べた}

久野 (1978) やTanaka (2001) は、右方転移構文が、二つの節を形成しており、二つ目の節で削除が起こるといふ分析を提案してきた。この分析の場合、(14b) で示すように、一見右に動いている要素は、実は二つ目の節で左に動き、それを残す形で削除が起こっているということになる。この分析を念頭に置いて、(15) を見てみよう。²

- (15) a. 二人以上のファンが持っているよ、ほとんどの選手のサインを。
b. 二人以上のファンがサインを持っているよ、ほとんどの選手の。

右方転移した目的語が主語よりも広い作用域を取ることは、Abe (1999) などで論じられているが、(15a) は、そのような例の一つである。右方転移した目的語が主語よりも広い作用域を取る読みは、話者によっては取りにくいという者もいるが、重要なのは、(15a) で、「ほとんど」が広いスコープを取る読みができる話者でも、(15b) のように、名詞句の主要部を置き去りにした形で、右方転移した例では、「ほとんど」の広い読みが取りにくいようである。(15a) と (15b) はそれぞれ二つ目の節で (16a) と (16b) のような構造を持っている。

- (16) a. [ほとんどの選手のサインを]₁ [₂三人以上のファンが₃持っている]]。
 b. [ほとんどの選手の]₁ [₂三人以上のファンが [₃サインを]持っている]]。

(16a) では、NP全体が、一方 (16b) では、「ほとんどの選手の」だけが動き、削除が起こっている。もし、LBCの違反が削除によって修復できるのであれば、LBSが統語部門で起こる、つまり、(16b) の派生が統語部門で起こっても、特に問題ないということになる。しかし、実際の (16b) の解釈を考えると、その可能性がないことがわかる。LBCの違反が削除によって修復できないのである。Barros et al. (2014) も、削除によって島の違反が修復できないと主張しており、本稿は、彼らの主張に対して、新しい裏付けをしたと言える。

5. まとめ

本稿では、LBSが意味解釈に影響を与えないということをもとに、LBSが音韻部門で適用される操作であり、意味解釈に影響を与えない長距離かきまぜも同様に音韻部門で適用されると主張した。また、ラベルが付与されていない構造から抜き出しができないというGoto (2016) の主張を採用し、統語部門でのかきまぜが、なぜ節境界を越えられないのかを考察した。最後に、LBCの違反が削除によって修復されるのかを議論した。

謝辞

長谷川信子先生には、学生時代から多くの助言やご指導をいただいた。この場を借りて心より御礼を申し上げます。また、本稿を作成するにあたって、二

名の査読者の方から有益なコメントをいただいた。本研究は科研費（課題番号：17K02815）の助成を受けたものである。最後に、本稿の誤りは、全て筆者の責任である。

注

- ¹ 一人の査読者の方から、このようなポーズは通例の談話研究ではTopicの位置であるとされており（Rizzi 1997などを参照）、談話や意味上の制限もあるのではないかというご指摘をいただいた。本論文の分析では、問題のかきまぜは音韻部門で起こるため、意味や談話上の制約をどのようにとらえることができるかは、明らかではない。大変重要な問題ではあるが、今後の課題とさせていただきたい。
- ² 綿貫(2006)やKato(2007)では、左方向へのかきまぜとは違って、右方転移構文では、(15b)のように「ほとんどの選手の」のような名詞句の主要部を修飾する要素を右方転移することができると観察し、そのようなLBC違反は、削除によって修復されると主張している。

参考文献

- Abe, Jun (1999) On directionality of movement: A case of Japanese right dislocation, Ms.
- Agbayabi, Brian, Chris Golston, and Toru Ishii (2015) Syntactic and prosodic scrambling in Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory* 33: 47-77.
- Arano, Akihiko, and Hiromune Oda (2019) The A-/A' bar distinction in scrambling revisited. *WCCFL* 36, 48-54.
- Barros, Matthew, Patrick D. Elliott, and Gary Thoms (2014) There is no island repair. Ms.
- Bošković, Željko (2004) Topicalization, focalization, lexical insertion, and scrambling. *Linguistic Inquiry* 34: 613-638.
- Bošković, Željko, and Daiko Takahashi (1998) Scrambling and last resort. *Linguistic Inquiry* 29: 347-366.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step*, ed. By Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In *Ken Hale: a life in language*, ed. By Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Fukui, Naoki (1986) A theory of category projection and its applications, Doctoral dissertation, MIT.
- Fukui, Naoki, and Hironobu Kasai (2004) Spelling-out scrambling. *Linguistic Variation Yearbook* 4: 109-141.
- Goto, Nobu (2016) Labability = extractability. *NELS* 46, 335-348.

- Kato, Takaomi (2007) On the nature of the left branch condition: Syntactic or phonological?
 In *Proceedings of Seoul International Conference on Generative Grammar 9*, 39-51. Seoul:
 Hankuk.
- Kikuchi, Akira (1987) Comparative deletion in Japanese. Ms. Yamagata University.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 東京:大修館書店
- Kuroda, S.-Y (1988) Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese.
 In *Papers from the second international workshop on Japanese syntax*, ed. By William J. Poser,
 103-143, Stanford: CSLI Publications.
- McCloskey, James (2002) Resumption, successive cyclicity, and the locality of operations.
 In *Derivation and explanation in the Minimalist Program*, ed. By Samuel Epstein, and Daniel
 Seely, 184-226. Oxford: Blackwell.
- Merchant, Jason (2001) *The syntax of silence: sluicing, island, and the theory of ellipsis*. Oxford:
 Oxford University Press.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In *Elements of grammar: A handbook
 of generative syntax*, ed. By Liliane Haegeman. 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Ross, John R. (1967) Constraints on variables in syntax. Ph.D. dissertation, MIT.
- Ross, John R. (1969) Guess who? *CLS* 5, 252-286.
- Ross, John R. (1986) *Infinite syntax!*. Norwood, N.J.: ALEX.
- Saito, Mamoru (1985) Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications.
 Ph.D. dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru (1989) Scrambling as semantically vacuous A'-movement. In *Alternative
 conceptions of phrase structure*, ed. By Mark R. Baltin, and Anthony S. Kroch, 182-200.
 Chicago: University of Chicago Press.
- Saito, Mamoru (1992) Long distance scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1:
 69-118.
- Saito, Mamoru (2003) A derivational approach to the interpretation of scrambling chains.
Lingua 113: 481-518.
- Saito, Mamoru, and Naoki Fukui (1998) Order in phrase structure and movement. *Linguistic
 Inquiry* 29: 439-474.
- Shiobara, Kayono (2017) A phonological approach to left branch condition. *FAJL* 8, 143-152.
- Tada, Hiroaki (1990) Scrambling(s). Ms. MIT.
- Takahashi, Masahiko, and Kenshi Funakoshi (2013) On PP left-branch extraction in Japanese.
UPenn working papers in Linguistics 19, 237-246.
- Takita, Kensuke (2020) Labeling for linearization. *The Linguistic Review* 37: 75-116.
- Tanaka, Hidekazu (2001) Right-dislocation as scrambling. *Journal of Linguistics* 37: 551-579.

日本語における左方枝分かれ条件について
(On the left branch condition in Japanese)

- Ueyama, Ayumi (2002) Two types of scrambling constructions in Japanese. In *Anaphora: A reference guide*, ed. By Andrew Barss, and Terence Langendoen, 23-71. Oxford: Blackwell.
- 綿貫啓子 (2006) 日本語の後置文 : 左方移動文との相違. *Scientific approaches to language* 5, 251-268.
- Yatabe, Shuichi (1996) Long-distance scrambling via partial compaction. *FAJL* 2, 303-317.
- Yoshimura, Noriko. (1992) *Scrambling and anaphora*. Doctoral dissertation, University of Southern California.